

## 知的障害者を育てる母親に対する発達支援

### — 老年期における子育ての振り返りから —

The support of mothers who brought up children with mentally handicap from the viewpoint of looking back at the process of their child raising in their old age

辻 あゆみ (公益財団法人鉄道弘済会総合福祉センター附属診療所)

Ayumi Tsuji (Clinic Attached to the Kousai-Gakuen Developmental Disorder Support Facility)

別府 哲 (岐阜大学教育学部)

Satoshi Beppu (Faculty of Education, Gifu University)

#### I・はじめに

障害児を育てる母親は、子どもと一体化し、自分の生活、将来が見通せなくなるという不安、自分の人生の選択肢が限定されたものになるという恐れを抱くことがある(藤原, 2002)。また、母親が子どもの発達の状況を適切に捉え、子どもの変化に自分を適応させて関わるのが難しく(岩坂, 2010)、その結果、子育てへの客観性を失い、混乱し、不安感を高めたり、嫌悪感や罪悪感を募らせたりし、母親としての自信を喪失することもある(Dowling, Nicoll, & Thomas, 2007, Nelson, Foster, & Raphael, 2011)。それ故に、児童発達支援ガイドライン(厚生労働省, 2017)では、子どもの発達を心配する母親の気持ちを出発点としながら、障害があっても子どもの育ちを支えていける気持ちが持てるようになるまでの過程を支援するように定めている。障害児を育てる母親への支援が必要不可欠であることは言うまでもないが、当事者である母親がどのような支援を求めているのかが明らかになっているわけでもなければ、その支援の内容が提言されているわけでもない。

障害児を育てる母親が求める支援を提言するには、母親が子育てを振り返り、成人期を迎えた子どもの姿を鑑み、乳幼児期の支援を評価する必要がある。そのため、辻・高山(2014)は、幼児期に知的障害児入所施設における母子短期入所を利用した青壮年期

の障害者の母親を対象にアンケートを実施し、母親が当時の支援をどのように思っているかを調べた。

その結果、当時の支援を「よかった」としている母親がいることが分かった。しかし、ここでは、母親がその支援の「何」をよかったとしていたかを明らかにするには至っていない。そこで、本研究では、このアンケートの記述内容を質的に分析することによって、母親が幼児期の支援の「何」をよかったとしているかを明らかにすることを第一の目的とする。

一般的な子育て支援では、母親自身が自己理解を深め、母親になったことによる葛藤を整理し、これまでの人生に母親であることを統合していくことが目指される(丸谷, 2014)。障害児を育てる場合には、それに加えて、障害への理解を深めること、障害特性に応じた対応を習得すること、将来への不安を乗り越えること、周囲の理解のなさによる理不尽さを乗り越えることが目指される(山根, 2013)。しかし、そうしたことを乗り越えていくには、多くの苦悩が伴うことが予測される。それでは、障害児者を育てる母親は、いつ頃からその苦悩を乗り越えていくようになるのだろうか。

障害児を育てる母親の心理は、苦悩や絶望、現実否認、不安、劣等感、混乱、焦りというネガティブな感情として焦点化されることが多い(夏堀, 2003)。しかし、母親の述懐には、子どもに寄り添うことで自分が生かされ、家族との絆が深まり結束が強くな

ったことや、子どもの障害を見つめ、受容し、共に生きることを通して自身のアイデンティティを見出したことが述べられることもある(藤原, 2002)。また、母親にとって子どもの障害は、自身の人生において成長をもたらしたものの、肯定的な影響を強く及ぼしたものとして意味づけられることもある(吉岡, 2010, 山根, 2012)。このように、障害児を育てる母親は、子どもを慈しみ育てる中で、子どもの成長を喜び、未来に思いを馳せ、大きな希望を抱くこともある。しかし、その心理は、幼児期、学齢期の障害児を育てる母親を対象として検討されることが多く(加藤, 1992, 夏堀, 2003, 一瀬, 2012, 小武, 2011)、老年期の母親の心理が焦点化されることは少ない。

山本(2014)は、人生後半期になるとネガティブな過去を含めてそれらをどう乗り越えてきたのかを再発見し、過去の辛さや葛藤を受け止め、折り合いをつけ、新たな感情的評価を持ち、統合するとしている。高井(2011)も、老年期には自分が過去になし遂げたことを回顧し、受容することにより自己を高く価値づけ、家族関係や対人関係においても、肯定的な自己の見方や自己の人生の肯定視が増加することを指摘している。そうであるならば、障害者を育てた母親も老年期になると、子どもとの関係の質を変化させ、子どもと折り合い、受け入れる調和性を高め、また、自己に対する考え方、捉え方の幅を広げ、自分の人生を肯定するようになるのではないかと推測される。そこで、本研究においては、障害者を育てた老年期の母親が、子育ての振り返りを通して嬉しかったことも辛かったことも含めて自分の人生を受け入れ、肯定するようになるかどうか探ることを第二の目的とする。

## II. 方法

### 1・母子短期入所の概要と対象者

母子短期入所の概要：知的障害児入所施設(以下A 学園とする)の母子短期入所は、幼児期の知的障害児と母親が一時的に3ヶ月間入所し、共に生活しながら療育支援を受けるもので、昭和48年から平成14年までの間、年に2, 3度実施された。この母子短期入所は、子どもが歩けることを条件に応募され、各回5~10名の親子が受け入れられた。

対象者：本研究の対象は、A 学園において昭和51

年9月から平成14年4月までに開所された母子短期入所を利用した母子のうち、参加当時の子どもの年齢が2歳から6歳(開所当時)の母親137名(このうち、転居先不明者が6名)であった。アンケートの配布に当たって、A 学園の園長にアンケートの配布主旨や倫理的配慮を説明した上で、平成25年4月にA 学園からアンケート用紙を配布してもらった。母親には無記名で回答し、密封して返信するように依頼した。その後1ヶ月以内にその封筒をA 学園にて回収し、筆者に手渡されるようにした。

アンケート回答者は69名であった(アンケート回収率は50.4%)。アンケートの対象となった母親の年齢は、49歳から81歳(平均年齢62.2歳)、子どもの年齢は、16歳から40歳(平均年齢33.0歳)であった(Table1)。

Table 1 アンケート記入時の母親と子どもの年齢

		母親の年齢 (M=62.2)	
		65歳未満 (人)	65歳以上 (人)
子の年齢 (M=33.0)	20歳以下	5	0
	21歳~30歳以下	13	1
	31歳~40歳以下	25	25
	小計(人)	43	26
	合計(人)	69	

子どもの性別は、男性が47名、女性が22名、現在の子ども生活拠点、自宅37名、施設等32名であった。子どもの障害の種類は、知的障害が48名、自閉スペクトラム症が20名、その他が1名、障害の程度は、最重度・重度が63名、中度・軽度が4名、その他が2名であった。

### 2. 手続き

#### (1) アンケートの内容

分析の対象となったアンケートの内容は、①「母子短期入所のどのような点がよかったですか。どのような点がよくなかったですか。」と②「母子短期入所が終わった後、お子さんに関して一番嬉しかったこと、もしくは、お子さんに関して一番辛かったことはどんなことですか。」である。これらの回答から、

子育てを振り返って、母親が母子短期入所のどのような点をよかった、もしくは、よくなかったとしているのか、ならびに、母子短期入所後に母親がどのような思いを有していたかを調べた。

アンケートに回答した母親は、母子短期入所を「よかった」とし、回答しなかった母親は「よくなかった」としている可能性が高い。また、「母子短期入所のよくなかった点」を記述した母親は1名のみであった。そのため、「母子短期入所のよくなかったこと」の分析は中断し、「母子短期入所のどのような点がよかったですか。」の回答から「母子短期入所のよかったこと」について調べた。

母親支援を考えるにあたって、社会階層との関係についても触れておく必要がある。当時こうした場を利用できた母親は、比較的余裕があり、家族に理解のある特別な層であったと推定される。そのことを念頭に置いた上で、本研究では母子短期入所という特別な集団に焦点を当てていることを強調しておきたい。

## (2) 分析方法

「母子短期入所のよかったこと」について具体的に記述をした母親は63名であった（有効回答率46.0%）。記述内容の記述者は母親であることから、文章の主語は母親である。それを踏まえた上で、文章を目的語と述語に分け、目的語内の主語に沿ってその記述内容を「子どものこと」と「母親自身のこと」に分類した。「子どものこと」とは、母親が子どもの姿を見て、その姿に対する母親なりの意味付けをし、記したことである。「母親自身のこと」とは、子育てを振り返り、母親が自分の思い、考えを記したことである。記述内容を見ると「子どものこと」もしくは、「母親自身のこと」のいずれか一方を記述している母親と、その両方を記述している母親がいた。そのため、母親の記述内容を「子どものこと」「母親自身のこと」「子どものこと・母親自身のこと」に分け、その数を調べた。

「母子短期入所後のこと」について具体的に記述をした母親は51名であった（有効回答率37.2%）。ここでは、「母子短期入所が終わった後、お子さんに関して一番嬉しかったことはどんなことですか。」、ならびに、「母子短期入所が終わった後、お子さんに関して一番辛かったことはどんなことですか。」と質問している。これらの回答のうち、前者を母子短期

入所後の「嬉しかったこと」、後者を母子短期入所後の「辛かったこと」として記述内容を分類した。記述内容を見ると「嬉しかったこと」もしくは、「辛かったこと」のいずれか一方を記述している母親と、その両方を記述している母親がいた。そのため、母親の記述内容を「嬉しかったこと」「辛かったこと」「嬉しかったこと・辛かったこと」に分け、その数を調べた。

母親の年齢によって記述内容に違いがあるかどうかを調べるために、有効回答を65歳未満と65歳以上の母親のものに分け、各項目の出現率を調べた。ここでは、Erikson(1959)に倣って65歳以上の母親を「老年期の母親」とし、65歳未満の母親を「成年期の母親」とした。

「母子短期入所のよかったこと」を記述した「成年期の母親」の人数は41名（母親の平均年齢は58.7歳、子どもの年齢は31.0歳）、「老年期の母親」の人数は22名（母親の平均年齢は67.8歳、子どもの平均年齢は36.5歳）であった。「母子短期入所後のこと」を記述した「成年期の母親」の人数は36名（母親の平均年齢は58.0歳、子どもの年齢は29.8歳）、「老年期の母親」の人数は15名（母親の平均年齢は67.5歳、子どもの平均年齢は36.5歳）であった。

「母子短期入所のよかったこと」ならびに「母子短期入所後のこと」について記述された内容をKJ法(1967)により詳細に分類した。その結果、「子どものこと」は、「情動」、「対人関係」、「適応」に分けられた。また、「母親自身のこと」は、「子ども理解」、「関わり方」、「自分の感情や考え」、「周囲からの理解や支え」に分けられた。これらをサブカテゴリとして記述内容をコード化した(Table2)。

コード化するにあたって、基本的に一つの文章は一つの記述として切片化した。一つの文章中に同一のサブカテゴリが含まれる記述がある場合には一つの記述とした。それに反して、一つの文章中に別個のサブカテゴリが含まれる場合には複数の記述とした。また、二つの文章であっても同じサブカテゴリに属する記述が重複している場合には一つの記述とした。さらに、同じ対象者が同一サブカテゴリの記述を重複して記述している場合には、そのサブカテゴリの記述数は1件とした。

記述内容の分類の妥当性を検討するために、筆者と障害のある子どもへの臨床経験を有する教師1名

と臨床発達心理士1名(以下「評定者」と略記)、計3名により評定した。評定の際には、筆者がTable2を示しながら分類および設定の方法について口頭で説明し、その後で独立して再分類し、評定するように依頼した。評定者間の一致率は、87.7%であった。評定が一致しない項目については、筆者と評定者で協議し、再分類した。

### III. 結果

#### 1・母子短期入所のよかったこと

幼児期に母子短期入所を利用した母親が母子短期入所の何をよかったとしているかを調べるために、母親の記述内容を「子どものこと」「母親自身のこと」

Table 2 記述内容の分類

カテゴリ	サブカテゴリ	概念	記述例
子どものこと	・情動	・快、不快の表出 ・興味関心	・楽しい時には豊かな表情になり、笑顔を見せる。 ・気に入らないことがあると、腕を噛んだり、頭をゴンゴンする。 ・アンパンマンのビデオ、パズルが大好きで楽しめる。 ・人形を使って想像の世界に暮って安心している。
	・対人関係	・他者との関わり	・家族以外の人とも関わるができる。 ・話を聞いてくれる人とよく話している。 ・自分の興味のあることを一方的に話してしまう。 ・言葉をうまく話せないで、友だちとの関係が難しい。
	・適応	・生活リズム ・生活習慣 ・社会適応	・便意がある時にトイレに座っているけれど、出なくて失敗してしまう。 ・野菜は苦手で、揚げ物ばかり食べる。 ・睡眠が乱れると心理的にも緊張が現れる。 ・発作は、薬でコントロールできているし、調整もうまくいっている。 ・一人で電車に乗って通学できる。
母親自身のこと	・子ども理解	・障害のこと ・障害による特性 ・子どもの将来像	・子どもの障害は、重いものだと認識した。 ・うちの子には、フィジカルな面へのサポートが必要だと思った。 ・こだわりがあって、感覚が過敏だと知った。
	・関わり方	・子どもとの関係性 ・関わり方	・関わり方を変えたら、余裕を持って関わる事ができた。 ・子どもを褒めて育てた。 ・つば吐きや噛みつきに対応するのは実際には難しい。 ・子どもに求めすぎているかを考えて関わるようになった。
	・自分の感情や考え	・自分の感情や考え方への気づき	・自分に自信が持てた。 ・一人で悩んで、抱え込む必要はないと思えた。 ・人の子と比べて泣きたくなることもあった。 ・自分の嫌な面を子どもに向けてしまう自分に驚いた。
	・周囲の理解や支え	・自分と子どもを取り巻く人との関係 ・周囲の人の理解や支えられ体験	・母が私を支えてくれたから、子どもを育てることができた。 ・親同士も仲良く、先生にも地域の人にもよくしてもらっている。 ・子どものことを話せる人が少なく、共感できる人が少なかった。 ・教師に子どものことを理解してもらえなかった。

「子どものこと・母親自身のこと」に分け、 $\chi^2$ 検定を行った。結果、「子どものこと」には4名(6.5%)、

「母親自身のこと」には34名(54.8%)、「子どものこと・母親自身のこと」には24名(38.7%)が記述



しており、記述内容に有意差が認められた ( $\chi^2(2) = 22.583, p < .01$ )。そこで、ライアンの名義尺度を用いた多重比較を行った ( $\alpha = 0.05$ )。結果、「子どものこと」は、「母親自身のこと」に比べて有意に低く ( $p < 0.0002$ )、また、「子どものこと・母親自身のこと」に比べても有意に低かった ( $p = 0.0004$ )。一方、「母親自身のこと」と「子どものこと・母親自身のこと」には有意な差はなかった ( $p > .05, n.s.$ )。

「母子短期入所のよかったこと」において年代による違いがあるかを調べるために、年代×記述内容（「子どものこと」「母親自身のこと」「子どものこと・母親自身のこと」）の2×3のクロス集計し、独立性の $\chi^2$ 検定を行った (Table3)。その結果、有意な連関は認められなかった ( $\chi^2(2) = 0.417, \text{Cramer's } V = 0.082, n.s.$ )。

**Table 3** 年代別にみる「母子短期入所のよかったこと」の記述内容

		子どものこと	母親自身のこと	子どものこと・ 母親自身のこと
成年期 <i>n</i> = 41	度数	2	22	16
	期待値	2.581	21.935	15.484
老年期 <i>n</i> = 22	度数	2	12	8
	期待値	1.419	12.065	8.516

$\chi^2(2) = 0.417, n.s. \text{Cramer's } V = 0.082$

「母子短期入所のよかったこと」の記述内容の詳細について調べ、Table4に示した。その結果、「子どものこと」では、「情動」11件 (7.3%)、「対人関係」7件 (4.7%)、「適応」12件 (8.0%) の記述があった。以下に具体的な記述例を挙げる（なお、記述の末尾に記された数字は、「対象者番号—子どもの年齢—母親の年齢」である。「情動」では、「本人がはりきっていたこと、イキイキしていたこと」(50—23—66) と記された。「対人関係」では、「子どもが家族以外の人との関わりに広がりを持てた」(27—38—62) と記された。「適応」では、「食べられるものがとても増え、嫌いな物がなくなった」(19—35—60) と記された。

「母親自身のこと」では、「子ども理解」27件 (18.0%)、「関わり方」28件 (18.7%)、「自分の考えや感じ方」40件 (26.7%)、「周囲の理解や支え」25

件 (16.7%) の記述があった。以下に具体的な記述例を挙げる。「子ども理解」では、「知的障害について論理的に学べたこと非常に役立ちました」(18—31—60) と記された。「関わり方」では、「子どもとの接し方、遊びや食事、身の回りの取り組みなど教えて頂いたと思います」(27—38—62) と記された。「自分の感情や考え」では、「息子の障害が自分のせいではないと整理された。自分を責める必要がなくなり、肩の力が抜けた」(32—36—63) と記された。「周囲の理解や支え」では、「他のお母さんたちとの縁ができたこと。仲間として様々なことで相談できた」(11—20—54) と記された。

**Table 4** 「母子短期入所のよかったこと」の記述内容の割合

カテゴリ	サブカテゴリ	記述数	%
子どものこと	情動	11	7.3
	対人関係	7	4.7
	適応	12	8.0
母親自身のこと	子ども理解	27	18.0
	関わり方	28	18.7
	自分の感情や考え	40	26.7
	周囲の理解や支え	25	16.7
		150	100

## 2・母子短期入所後のこと

幼児期に母子短期入所を利用した母親が子育てを振り返ってどのような思いを有しているかを調べるために、母子入所後のことの記述内容を「嬉しかったこと」「辛かったこと」「嬉しかったこと・辛かったこと」に分け、 $\chi^2$ 検定を行った。その結果、「嬉しかったこと」には9名 (17.6%)、「辛かったこと」には19名 (37.3%)、「嬉しかったこと・辛かったこと」には23名 (45.1%) が記述しており、記述内容に有意差は認められなかった ( $\chi^2(2) = 6.118, p < .05, n.s.$ )。

「母子短期入所後のこと」において、年代による違いがあるかを調べるために、年代×記述内容（「嬉しかったこと」「辛かったこと」「嬉しかったこと・辛かったこと」）の2×3のクロス集計し、独立性の $\chi^2$ 検定を行った (Table5)。その結果、年代と記述内容の間に有意な連関が見られた ( $\chi^2(2) = 10.456,$

**Table 5** 年代別にみる「母子短期入所後のこと」の記述内容

		嬉しかったこと	辛かったこと	嬉しかったこと・辛かったこと
成年期 n=36	度数	8	17	11
	期待値	6.353	13.412	16.235
	調整済み	1.328	2.281	-3.233
	残差	ns.	*	**
			$p < .05$	$p < .01$
老年期 n=15	度数	1	2	12
	期待値	2.647	5.588	6.765
	調整済み	-1.328	-2.281	3.233
	残差	ns.	*	**
			$p < .05$	$p < .01$

$\chi^2(2)=10.456, p < .01$  Cramer'sV=0.453

$p < .01$ , Cramer'sV=0.453)。さらに、残差分析の結果、成人期の母親の記述内容に比べて、老年期の母親の

記述内容は、「嬉しかったこと・辛かったこと」の比率が高く ( $p < .01$ )、「辛かったこと」の比率が低かった ( $p < .05$ )。

「母子短期入所後のこと」の記述内容の詳細について調べ、Table6 示した (ここでは、サブカテゴリの上位3つを以下に示した)。成年期の母親の「嬉しかったこと」では、「周囲の理解や支え」8件 (11.0%)、「適応」7件 (9.6%)、「自分の感情や考え」6件 (8.2%) の記述があった。成年期の母親の「辛かったこと」では、「適応」13件 (17.8%)、「周囲の理解や支え」10件 (13.7%)、「対人関係」「関わり方」「自分の感情や考え」4件 (5.5%) の記述があった。老年期の母親の「嬉しかったこと」では、「自分の感情や考え」7件 (18.9%)、「適応」6件 (16.2%)、「周囲の理解や支え」5件 (13.5%) の記述があった。老年期の母親の「辛かったこと」でも、「適応」5件 (13.5%)、「自分の感情や考え」「周囲の理解や支え」3件 (8.1%) の記述があった。さらに、成年期の母親の「周囲の

**Table 6** 年代別にみる「母子短期入所後のこと」の記述内容の割合(\*重複回答)

			成年期		老年期	
	カテゴリ	サブカテゴリ	記述数	%	記述数	%
嬉しかったこと	子どものこと	情動	5	6.8	2	5.4
		対人関係	6	8.2	1	2.7
		適応	7	9.6	6	16.2
	母親自身のこと	子ども理解	1	1.4	0	0.0
		関わり方	1	1.4	0	0.0
		自分の感情や考え	6	8.2	7	18.9
		周囲の理解や支え	8	11.0	5	13.5
		合計	34	46.6	21	56.8
辛かったこと	子どものこと	情動	2	2.7	1	2.7
		対人関係	4	5.5	2	5.4
		適応	13	17.8	5	13.5
	母親自身のこと	子ども理解	2	2.7	2	5.4
		関わり方	4	5.5	0	0.0
		自分の感情や考え	4	5.5	3	8.1
		周囲の理解や支え	10	13.7	3	8.1
		合計	39	53.4	16	43.2

理解や支え」と「適応」の割合は、「嬉しかったこと」より「辛かったこと」の方が高かったのに対して、

老年期の母親の「周囲の理解や支え」と「適応」の割合は、「辛かったこと」より「嬉しかったこと」の方

が高かった。

「嬉しかったこと・辛かったこと」に記述された内容のうち、同じ母親が同一サブカテゴリに記した内容を Table7、Table8 に示した。成年期の母親の中には、「自分の感情や考え」を記述する者はいなかったが、老年期の母親のうち3名が「自分の感情や考え」を記した。以下にその記述例を挙げる。

成年期の母親の「対人関係」では、「変わらず人が好きなこと、関わってくれる誰にでも自分をアピールしているいろんなことに積極的にチャレンジしようとする姿」と「常にしゃべり続けて反応を求めるので疲れます」(2-16-49)と記された。また、「適応」では、「少しずつ多動などの問題行動や強いこだわりなどが減ってきて集団行動などに馴染めるようになっていったこと」と「思春期に入ると思い通りにならない時に人を叩いたり、自分の指をかんだりする自傷行為が出てきたこと。小学校6年間はとても穏

やかに過ごしてきただけに突然の変わりようにびっくりした」(5-16-51)と記された。

老年期の母親の「適応」では、「施設の生活に慣れて自立できたこと」と「施設の生活に慣れず、脱走したり、食事もできないほど本人の拒否が強かった時期」(64-37-76)と記された。「自分の感情や考え」では、「母子入園が終わって35年位経ち、たくさん喜びをもらいました」と「中学時代、できないことばかりを責められ、私自身が子育てを楽しめなかった。今思うと身を持って抗議しなかった私は親として弱かったと思う」(46-36-65)と記された。「周囲の理解や支え」では、「母子(母子短期入所)の親とは今でも付き合い、連絡を取り合っています」と「幼稚園、小学校と先生に分かってもらうまで辛いと言うか大変だった」(46-36-65)と記された。

**Table 7 成年期の母親における「嬉しかったこと・辛かったこと」の例**

サブカテゴリ	NO	子	母	嬉しかったこと	辛かったこと
対人関係	2	16	49	変わらず人が好きなこと、関わってくれる誰にでも自分をアピールしているいろんなことに積極的にチャレンジしようとする姿。	常にしゃべり続けて反応を求めるので疲れます。
適応	5	16	51	特に一番というのはないが、少しずつ多動などの問題行動や強いこだわりなどが減ってきて集団行動などに馴染めるようになっていったこと。	思春期に入ると思い通りにならない時に人を叩いたり、自分の指をかんだりする自傷行為が出てきたこと。小学校6年間はとても穏やかに過ごしてきただけに突然の変わりようにびっくりした。
	29	34	63	30年間、色々なことがあると思います。学校へ行っている時はコツコツ作業をする、集中していることに感動したり、言葉のない最重度の子なのに電車を利用して自立通学ができたこと、頑張ったら頑張った分、時間はかかるが結果が出たこと。	自力通学訓練中に担任の先生がうっかり目を離してしまい電車に乗ったまま行ってしまった。
周囲の理解や支え	42	38	64	家族はとても協力的だった。母子入園のお陰で今の自分がある。	子どもが、母子入園が好きで、もっとずっと続けたがったこと。同じような療育施設が近くに欲しかったと思いました。

#### IV. 考察

##### (1) 幼児期支援に求められていること

「母子短期入所のよかったこと」では、「子どものこと」に比べて「母親自身のこと」の記述が多く、年代による差異がなかった。この結果は、母子短期入

所における支援が子どもへの支援のみならず、母親にもなされたことを、また、どの年代の母親もそれをよかったとしていることを示唆している。堀家(2014)によれば、母親は自身の心理的安定が図られる場が保障されることで、子どもを観察し、子どものよい所をも含めて子どもへの理解を深め、育て

への積極性を身につけるとされる。また、久保(2017)も、母親は支援者から共感的理解を得られたと感じた時、自分の感情を調整して子どもに応じて関わるようになるとしている。「母親自身のこと」の割合が高かったこと、中でも「子ども理解」や「関わり方」の割合が高かったことから、母親は支援を通して子どもへの理解を深め、子どもとの関わり方を学んだことをよかったとしていると言える。

大鐘(2011)は、母親自身がサポートを受けている

と感じることで、母親として成長する気持ちが持てるようになるとしている。「自分の感情や考え」の割合が特に高かったことから、母親は支援されることによって自分の感情や考えへの気づきをもたし、それをよかったとしていると言える。そしてそれには母親と対話する支援者の存在も欠かせないものであったであろうし、母親が子どもを通して自分の感情や考えを省み、それを調整し、適切な関わり方を身につける経験も必要不可欠であったと考えられる。

**Table 8 老年期の母親における「嬉しかったこと・辛かったこと」の例**

サブカテゴリ	NO	子	母	嬉しかったこと	辛かったこと
適応	64	37	76	施設の生活に慣れて自立できたこと。	施設の生活に慣れず、脱走したり、食事もできないほど本人の拒否が強かった時期。
	62	36	71	排泄は、定時排尿をしていった結果、失敗のない子になりました。	重度の知的障害だけで大変なのに、アトピーとぜんそくがあることが辛いです。心配です。
自分の感情や考え	46	36	65	母子入園が終わって 35 年位経ち、たくさん喜びをもらいました。	中学時代、できないことばかりを責められ、私自身が子育てを楽しめなかった。今思うと身を持って抗議しなかった私は親として弱かったと思う。
	63	39	73	子どもの様子をきちんとみて周囲の人に理解してもらえようように伝えていくことの役割が親にあることをよく分かり実行してきました。	養護学校の小学部では、体力をつけることが重視されました。長距離歩行、登山、水泳、自転車乗りと次々課題が課せられました。成長した面もある一方、親として悩みました。
周囲の理解や支え	46	36	65	母子の親とは今でも付き合い、連絡を取り合っています。	幼稚園、小学校と先生に分かってもらうまで辛いと言うか大変だった。

「子どものこと」に比べて「周囲の理解や支え」の割合が高かったことから、母親は周囲の人に支えられたことをよかったとしていると言える。母親の気持ちが落ち着き始めるきっかけは、周囲の人々の理解や、同じような境遇の母親たちとの出会いであることであり(目良・柏木, 1998)、そうした出会いを通して、母親は自分の置かれた立場や事情に応じて気持ちを言語化したり、情報交換をしたりし、自らを振り返り、新しい視点を獲得するという(阿部・太田・神名・石井, 2013)。それ故に、母親への支援においては、母親が同じ境遇の母親と出会える場を設け、そうした場において自分の思いを言語化し、それに共感されるようにしていくことも重要と考えられる。

「子どものこと」では「適応」と「情動」の割合が高かった。この結果から、母親は子どもが適応する

姿や情動を表出する姿を望み、それが叶ったことをよかったとすると言える。母親がそうした気持ちになるには、子どもが情動を表出し、適応するようになる姿を母親が実感できるようにすることが必要であり、それには子どもの発達に見合った関わり方を母親に伝えることも必須であろう。それ故に、幼児期の支援では、子どもの発達を保障する取り組みを通して、子どもが発達していく様を母親が実感できるようにしていくことが重要と考えられる。

本研究の結果から、母親は幼児期の支援に対して、子どもが適応できるようになることや豊かな情動を表出するようになることを望み、また、母親自身が子どもを理解し、子どもに関われるようになることを、子どもを通して自分の感情や考えに気づけるようになることを望んでいることが明らかになった。それゆえに、幼児期の支援は、子どもの療育のみな



らず、母親が支援者や他の母親から支えられるような心理的支援も含めて展開される必要があると考えられる。

## (2) 障害者を育てる母親への発達支援

「母子短期入所後のこと」では、全体的に見ると「嬉しかったこと」「辛かったこと」「嬉しかったこと・辛かったこと」に差異がなかった。それにもかかわらず、年代による差異が見られた。これは、多くの母親が子育てを通して嬉しいことも辛いことも同等に経験してきたことを示唆する一方で、その捉え方は、年代によって異なることを示唆している。中でも、「辛かったこと」の記述が老年期になると減少し、「嬉しかったこと・辛かったこと」の記述が増加した。これは、老年期の母親が過去の出来事を想起する中で、辛いこともあったけれど、嬉しいこともあったと捉え直す傾向があるためと考えられる。

「適応」と「周囲の理解や支え」では、多くの母親が「嬉しかったこと」と「辛かったこと」の両方で記していた。この結果から、母親は子どもが適応することができれば嬉しいと思い、適応することが難しい状況に遭遇すれば辛いと思うのだと言える。同様に、母親は周囲から理解され、支えられたことに感謝の気持ちを有し、それを嬉しいと思う一方で、そうした場や人に出会えないことや子どもを理解してもらえないことを辛いと思うのだと言える。それはすなわち、障害者を育てる母親が、児童期以降も周囲から理解され、支えられることを、また、子どもが持っている力で適応することを望み、それが叶った時には嬉しいを思い、叶わなかった時には落胆し、辛いと思うことを意味する。

とはいえ、年代によってその傾向に違いが見られた。成年期の母親の「適応」では、「辛かったこと」の割合が高かったのに対して、老年期の母親では「嬉しかったこと」の割合が高くなった。これは、成年期の母親が子どもの適応を期待し、それが成し遂げられないことを辛いと思う一方で、老年期になるとその期待は薄れ、子どもが適応した出来事を嬉しかったこととして回想するためと考えられる。また、成年期の母親の「周囲の理解や支え」では、「辛かったこと」の割合が高かったのに対して、老年期の母親では「嬉しかったこと」の割合が高かった。これは、成年期の母親が周囲の理解のなさにより傷ついたり、苦悩したりすることがある一方で、老年期に

なると周囲への感謝の気持ちが高まり、周囲の姿勢や振る舞いに傷ついたり、苦悩することが乏しくなることを示唆している。これらの結果は、老年期の母親が子どものありのままの姿を受け止め、肯定するようになったことを、また、周囲の理解のなさによる理不尽さを乗り越えたことを意味するのではないかと考えられる。

「嬉しかったこと・辛かったこと」に記述されたもののうち、同じ母親が同一サブカテゴリに記述した内容を見た場合、成年期の母親は、「適応」「対人関係」「周囲の理解や支え」について記していた。このうち、「対人関係」や「適応」では、関わりや問題行動、自立通学など特定の出来事を取り上げ、それらを「嬉しかったこと」にも「辛かったこと」にも挙げていた。これは、成年期の母親が特定の事象を焦点化し、それを両義的に捉え、相反する気持ちを記す傾向があるためと考えられる。それに対して、老年期の母親は「対人関係」について記しておらず、「適応」「周囲の理解や支え」に加えて「自分の感情や考え」について記していた。これは、老年期の母親が子育てを通して自分の思いや考えの変化にも気づき、自分の人生を嬉しかったこともあれば、辛かったこともあったと両義的に捉え直すためと考えられる。また、老年期の母親の「辛かったこと」では、具体的な出来事が想起され、記述されたのに対して、「嬉しかったこと」では、具体的な記述がなく、総体的な捉えが記された。山本(2014)は、人生後半期になると過去の辛さや葛藤を受け止め、新たな感情的評価を持ち、統合するとしている。本研究の結果からも、老年期の母親は特定の出来事を「辛かったこと」として受け止めながらも、子育て全体を通しては喜びが得られたと捉えているのではないかと考えられる。

老年期の母親の記述から、子育てを楽しめなかった時期があったこと、弱かった自分がいたことを受け止めながらも子育てを振り返って喜びを得たことや、後悔を感じながらも努力した自分がいたことを回想する姿が窺われた。高井(2011)は、老年期には肯定的な自己の見方や自己の人生の肯定視が増加すること、ならびに、子どもを大切に思い、子どもと折り合い、受け入れる調和性が上昇し、子どもに対する意味付けが変わっていくと主張している。本研究においても、障害者を育てた母親も老年期になる

と、苦難を受け止めながらも子育てに喜びがあったことを回想することが明らかになった。それ故に、障害者を育てた老年期の母親は、子どもに対する意味付けを変化させ、子どもを受け止め、苦難を乗り越えてきた自分の人生として受け入れ、肯定するようになると考えられる。

障害者を育てた母親は、何らかのきっかけや節目で迷いと不安・焦りを感じながらも悲観と回復を繰り返し、その繰り返しを通して、相反する行為と感情の経験から母親としての人間的成長を見せるというが(泊・豊永, 2005)、本研究の結果からそれには長い年月がかかることが明らかになった。そのため、障害児者を育てる母親は、同じ境遇の母親同士が支え合える環境のもと、障害を含めて子どものことを理解できるように、生涯に渡って継続して支援される必要があり、そうした支援のもとでこそ、自分の感情や考えに対する気づきもたらされ、障害児者の母親になったことによる葛藤を整理し、母親自身が成長、発達すると考えられる。

## V. 今後の課題

Erikson(1959)、Erikson & Erikson(1997)は、65歳以上を老年期とし、その発達課題を自己統合対絶望としている。Eriksonは、自己統合化を自分の人生の中で重要な存在であった人々をあるべきものとして、もしくは、必然的にかげがえのない存在として受容すること、自分の人生は自分自身の責任であるという事実を受け入れることと定義している。この定義に基づくならば、人は老年期になってようやく重要な人の存在や自分の人生を受け入れるようになると考えられる。そしてそれは、障害児者を育てる母親においても同様なのかもしれない。本研究の結果から、障害者を育てた老年期の母親は子どもや自分の思いや考えに対する意味付けを変化させることが明らかになったが、それを自己統合化としてよいかどうかは疑問が残る。そのため、障害者を育てた母親において自己統合化を遂げるかどうかは今後の課題としたい。

本研究は、母子短期入所を利用した極めて限定された母親に対して行ったアンケートの結果から得た知見である。そのため、他の多くの障害者を育てた母親に同様の結果が得られるかどうかは明らかでな

い。また、本研究においては、障害の種類や程度による違いについて触れることはできなかった。これらの点については今後の課題としたい。

## 謝辞

本研究に快くご協力して下さった A 学園元園長、現園長、アンケートに協力して下さったお母様方、ご助言をいただきました横浜国立大学名誉教授高山佳子先生に心より感謝申し上げます。

## 引用文献

- 阿部 美穂子・太田 千裕・神名 昌子・石井 郁子(2013). 障害のある子どものきょうだいを育てる親の子育て観の変容—家族参加型支援セミナーの参加を通して— 富山大学人間発達科学部紀要,8(1),85-99.
- Dowling ,C., Nicoll ,N., & Thoma ,B. (Eds.) (2004). *Lesson from my child : Parents' experiences of life with a disabled child.* Australia:Finch Publishing Pty, Ltd. (ドウリング,C.,& ニコル,N. 上原 裕美子(訳)(2007). わが子と歩む道—「障害」をもつ子どもの親になるということ— 株式会社オープンナレッジ).
- Erikson, H. Eric. (1959). *Identity and the Life Cycle.* International Universities Press,Inc.(西平 直・中島 由恵(訳).アイデンティティとライフサイクル 誠信書房)
- Erikson, E. H,& Erikson, J. M.(1997). *The Life Cycle Completed: A Review.*(村瀬孝雄・近藤邦夫(訳).ライフサイクル、その完結 みすず書房).
- 藤原 理佐(2002). 障害児の母親役割に関する再考の視点—母親のもつ葛藤の構造— 社会福祉学,43 (1) ,146-154.
- 堀家 由妃代(2014). 発達障害児の親支援に関する一考察 佛教大学教育学部学会紀要,13,65-78.
- 一瀬 早百合(2012). 障害のある乳幼児と母親たち生活書院
- 岩坂 英巳(2010). 家族を支援する.田中康雄(編)発達障害の理解と支援を考える 臨床心理学増刊第 2号,金剛出版
- 厚生労働省 (2017). 児童発達支援ガイドライン <https://www.mhlw.go.jp> (2018年12月19日)
- 加藤 正仁(1992). 発達障害乳幼児とその家族の援助 発達障害研究,14(2),91-97.

- 小武内 行雄(2011). しつけを通じた親の「悩み」「成長」と子どもにおけるしつけ認知との関連 教育心理学研究,59,414-426.
- 川喜田 二郎(1967). 発想法—創造性開発のために— 中公新書
- 久保 信代(2017). 自閉症を抱える子どもと親の関係支援. 181-195. 北川 恵・工藤晋平 (編著) .アタッチメントに基づく評価と支援. 誠信書房
- 丸谷 充子(2014). 子育て支援における親の生涯発達支援の意義—親としてのアイデンティティの統合— 浦和大学短期大学部浦和論叢,50,133-147.
- 目良 秋子・柏木 恵子(1998). 障害児をもつ親の人格発達—価値観の再構築とその要因— 発達研究 : 発達科学研究教育センター紀要,13,45-51.
- 夏堀 撰(2003). 障害児の「親の障害受容」研究の批判的検討 社会福祉学,44(1),23-33.
- Nelson, J., Foster, S., & Raphael, A. (2011). *Positive Discipline: For children with special needs.* USA : Three Rivers Press.
- 大鐘 啓伸(2011). 母子通園施設を利用した母親の心理状態: 支援過程において障害児を持つ母親の表出された気持ちから 発達心理学研究,22,308-317.
- 高井 範子(2011). 自信感形成要因および自信心の発達の变化 健康心理学研究,24(1),45-58
- 泊 祐子・豊永 奈緒美(2005). 障害児を育てる親の「親となる」意識の発達 岐阜県立看護大学紀要,6(1), 3-10.
- 辻 あゆみ・高山 佳子(2014). 障害児を育てる母親支援のあり方—母子短期入所を利用した母親へのアンケートから— 日本発達心理学会第 25 回大会発表論文集
- 山本 由子(2014). 高齢者における Life Review の概念分析 老年看護学,18(2),85-94.
- 山根 隆宏(2012). 高機能広汎性発達障害児・者をもつ母親における子どもの障害の意味付け—人生への意味づけと障害の捉え方との関連— 発達心理学研究,23,145-157.
- 山根 隆宏(2013). 発達障害児・者をもつ親のストレス—尺度の作成と信頼性・妥当性の検討 心理学研究,83,556-565.
- 吉岡 恒生(2010). 発達障害児の支援②—乳幼児期の母親支援と小学校期の学校での支援—愛知教育大学教育実践総合センター紀要,13,251-258.

